

御身の赦しのパン

牧師 山本 護

遍歴する H.ヘッセ(1877～1962)を手本にして私も遍歴しました。若者らしく旅をしながら『シッダールタ』を読み、旅に疲れて帰郷するとインド思想を勉強した。遍歴はまだ続いて紆余曲折、牧師になり、八ヶ岳あたりに定着してすでに30年が経ちました。

ヘッセは神学教育を受けますがインドや中国の思想に傾倒し、神智学やオカルティックなものにも平気で踏み込んでいきました。晩年は、庭いじりに没入する気難しそうなお爺さんでしたが、幼年時代に養われたキリスト教敬虔派への回帰が見られます。シッダールタは第一次大戦の荒廃の中で書かれ、第二次大戦末期の1944年には『イエスと貧しい者たち(Jesus und die Armen)』という素朴で鋭利な詩を記しました。

「～御身は全ての罪人の苦しみのために死にました／御身の肉体は聖なるパンとなりました／そのパンを僧と正しい人々は食べますが／飢えた私たちは彼らの戸口に物乞いに行きます／私たちは肥え太った僧が満腹しているもののため／ちぎり与える御身の赦しのパンを食べません／さて彼らは行き、金を儲け、戦い、殺します～／はらからなるキリストよ、御身は虚しく悩みました／満腹している人々に、彼らの求めるものを与えなさい！／私たちは飢えた者は御身から何物も求めず／ただ御身を愛するばかりです。御身は私たちの一人ですから」。

八ヶ岳教会礼拝堂の軒下で朽ちていくスズメバチの巣、
「ちぎり与える御身の赦しのパン」のように見えて、顎が痛くなるほど眺めていた。そんなことから、ふと思い出し、書棚ひっくり返してヘッセの詩集を探しました。

「金を儲け、戦い、殺している」肥え太った僧や「正しい人」が御身のパンを食べるならば、それを食べないという驚くべき決意。聖礼典を考える時、たえず変化している現実の文脈も検討の項に加えるなら、

「御身」が献げられた「罪人の苦しみ」をいっそうこの身に覚えられるかもしれません。Ω

